人は手続き記憶によって他者と関わるのか

橋本　圭子*

(平成28年10月31日受理)

Do We Interact Through Procedural Memory ?

Keiko HASHIMOTO*

Procedural memory refers to retrieval of information through performance, and is distinct from declarative memory which is representable in language or image. This article discusses seeing interpersonal behavior as a kind of procedural memory. Some attachment theorists and psychoanalysts have realized the significance of introducing ideas on cognitive science into their theory and clinical fields. In their view, procedural memory which is characterized by implicitness (unconsciousness) and developmental earliness is a key concept in explaining the infant-mother dyad and patient-therapist dyad. Change Process Study Group of Boston terms this procedural memory "implicit relational knowing". Furthermore, some discussions suggest that the interaction through procedural memory continues during life. From the perspective of cognitive psychology, we should be prudent in applying widely the concept of procedural memory to intersubjective relation.

Key words: procedural memory, implicit memory, interpersonal behavior, intersubjectivity

1. はじめに

手続き記憶は，記憶理論では，行動や認知のプロセスの記憶をいい，また記憶内容を言葉などにより象徴的に表現できる宣言的記憶に対して，記憶内容自体を言語化・意識化することが難しい記憶とされる．いわゆるスキルとして身につけた記憶である．また，想起時，すなわちスキルの実行時には，一般には想起しているという意識を伴わない．このような特徴から，手続き記憶と言語獲得以前の幼児の記憶との関連も注目されることになる．筆者は先に発達早期の記憶は手続き記憶的な特徴を多く有するものであることについて論じたが[1]，その議論の中で愛着関係は手続き記憶であるというCrittendenの主張[2]，[3]についても紹介した．それによれば，特定の養育者との間で交わされる体験の繰り返しから，子どもは愛着対象との関わりについての手続き記憶的な作業モデルを形成するのだということであった．

ところで愛着理論はFonagyによれば[4]，Bowlby以来，認知心理学の視点を取り入れて発展してきた一方で，精神分析学派からは長く異端とされてきた．しかし近年，愛着理論と精神分析理論の間の歩み寄りがみられるようになり，またそのことは認知心理学と精

* 心理学（機械制御システム工学科）准教授　Psychology (Department of Mechanical and Control Engineering), Associate Professor

神分析理論を接近させることにもなっているという．このような，以前ならばおよそ相容れないとされてきた心理学諸学派からの知見が，実証的また理論的探究の下に統合されることは意義深いことである．精神分析理論と実験心理学・認知心理学の接近は，このあと述べる間主観的アプローチや，ボストングループと呼ばれる研究者グループにおいてもみられる．なかでもボストングループは，記憶研究の成果，特に手続き記憶概念を積極的に取り入れて，精神分析理論の再考とともに，人の相互交流のあり方について論じている．もっとも，精神分析理論そのものについて議論することは筆者の力を大きく超えることである．本論では，手続き記憶の視点から彼らの主張するところとその意味について考察することとしたい．

2. 間主観性理論における“オーガナイジング・プリンシプル”

精神分析学の分野では，従来の伝統的なFreudの治療観ではなく，治療場面における患者−治療者の関わりを間主観性の視点で理解しようとするStolorowを中心とする立場がある[5]，[6]．伝統的な精神分析学では，Freudによって理論化された心の構造やはたらきの原理に基づいた治療上の規則があり，治療者にはそのテクニックを磨くことが求められるという．それが，中立性，禁欲規則など，治療者が守るべき幾つかの教条である．これに対して，間主観性理論では，現実の治療関係は治療者と患者の2つの主観によってつくられるものと考え，そうしたFreudの教条は“神話”として退けられる．間主観的アプローチによる精神分析の治療観では，臨床作業は個別的・関係的であるととらえられ，従って治療者のあり方として，分析的な正しい関わり方があるのではなく，望まれるのは，その治療者−患者ペアにとって何が治療的に有効かを問い続ける姿勢なのだという．精神分析的治療はテクニックではなく，プラクティスであるという彼らの主張の意味はここにある．もっとも，この理論は精神分析理論を否定しているのではない．転移のような原理は教条としてではなく，治療場面での一現象としてその意義が与えられている．間主観性理論は精神分析のメタ理論として，Freud以来の理論を再考するものという位置づけである．

この理論において，主観性の成分とされるのが“オーガナイジング・プリンシプル”である．これはOrangeら[5]によれば，人がこれまでの情緒的体験，特に早期の養育者とのやりとりから得た“情緒的結論”で，患者の主観的生活の中で，意識されずに繰り返しテーマとして表れてくる（ここでの“意識されずに”は，Freudの抑圧による無意識のことではない）．このオーガナイジング・プリンシプルという概念は明らかに，愛着理論の“内的作業モデル”や，認知のスキーマを思い起こさせるものである．また，次節のボストングループが主張する手続き知識*とも対応する概念であることは，丸田[6]が述べているところで，また彼はこの手続き知識という概念が分析治療過程の解明に光明を与えてくれるであろうと評価している．丸田は，手続き知識についてテニスやゴルフの球の打ち方を例に挙げ，言葉での説明が出来ないわけでないが，身体が覚えているもの，言葉にすることは難しいものと説明する．そして，他者と共にあるあり方もこのような暗黙の知識に基づく，

---

* = procedural knowledge．丸田は“手順知識”と訳しているが，本論では記憶理論で一般的に使用される“手続き知識”の語ををあてる．

というボストングループの見解に同意する．一方丸田によれば，オーガナイジング・プリンシプルはボストングループの手続き知識に比べて，より包括的な概念であり，関係性に関する知識だけでなく認知を含むものであるという．それに従えば，手続き知識はもちろんのこと，愛着理論の内的作業モデル，認知のスキーマも含むような，かなり抽象的な概念になる．ただ，Orangeらの定義にあるように，これが発達早期の養育者との情緒的やり取りの中で形成されることは特に重視されている．さらに丸田によれば，オーガナイジング・プリンシプルは大部分の人にとって前自省的で，心理的な洞察が可能な人だけが意識することができるという．しかもその自省には無数のレベルがあり，自分で十分理解したつもりでも，それでも前自省的な部分が残ることがある．認知行動療法などの短期の治療では前自省的な部分が多く残るために，治療的な変化が期待できないのだという．治療で目指されるのは，患者の葛藤の根底にあるオーガナイジング・プリンシプルが間主観的な場で変化する・再構築されることだが，それは治療者が言語化して伝えることによって達成されることもあるし，治療場面で共有される体験によって達成されることもあるのだという．そういう点でもオーガナイズ・プリンシプルという概念は包括的なものである．手続き知識はというと，オーガナイジング・プリンシプルのうち関係性に限局された概念であるとして，その点については丸田はボストングループの見解をほぼ認めているようである．次節ではボストングループの主張する手続き知識について，詳しく述べたい．

3. “関わり方について暗黙に知ること implicit relational knowing”

Change Process Study Group of Boston（ボストングループと称される[6]）は，精神分析的治療における変化をもたらすには洞察以上の何かが必要であるという考えのもとに，Edward Tronick, Daniel Sternらを中心として1990年代半ばに結成された研究グループである[6],[7]．この“洞察以上の何か”とともに，治療過程を理解する鍵として，彼らが共有する概念が“implicit relational knowing”である[8]．“implicit relational knowing（関わり方について暗黙に知ること）”は，記憶理論の潜在記憶（implicit memory）に由来するもので，顕在記憶／潜在記憶—あるいは宣言的記憶／非宣言的記憶—という，記憶の２システム論が根拠になっている．

記憶研究者のSchacterによれば潜在記憶研究の始まりは1980年代とされる[9]．意識的／無意識的という意味では，顕在／潜在の区別はそれ以前よりあり，また健忘症患者においても潜在記憶は損なわれないという症例も既に知られていたが，1980年代になって様々な記憶研究法が工夫されたことにより，研究が大きく進んだのだといわれる．その結果記憶理論では，長期記憶については顕在記憶と潜在記憶の二分法が定着した．前者は，事実に関する知識や過去の出来事を思い出すときのように，言葉やイメージでその内容を表明することができ，また想起しているという意識を伴う記憶であり，意味記憶とエピソード記憶がこれにあたる．後者は，記憶内容を言葉などで象徴的には表明できないが，行為として実行できる記憶である．両記憶の根本的な違いは想起の意識を伴うか否かという点にある．潜在記憶には，手続き記憶の他に，条件づけ反応やプライミング記憶なども含まれ，手続き記憶にも運動，認知，知覚など処理レベルの異なる様々なスキルがある．これらの記憶の相違を説明する理論の一つが複数システム論で，特に脳内には潜在／顕在記憶

の2つの異なる記憶システムがあるとする立場は有力な説としてよく知られるようになった（Baddeley, Eysenck, & Anderson, 2009. も参照[10]）．当時の精神分析家たちもこれに関心を持ったわけで，Tronickらによる *Infant Mental Health Journal* における1998年の特集号は，精神分析理論の再考に認知科学の知見を取り込んだ試みでもあった．

Lyons-Ruthら[7]が述べるところによると，ボストングループが手続き記憶に注目することになった経緯は次のようなことであるらしい．彼らは既に，精神分析的な治療過程において重要な変化が起こる時には，解釈や洞察ではない何かがあるという実感を抱えていた．それは人と人の真の結びつきのようなもの，そしてこれは乳児と養育者との関係にもつながるようなものだという考えの下，この問題に取り組み始めた．それが治療過程の変化に関する研究グループ，ボストングループである．彼らはFreudの伝統的な分析理論の枠組みの中で検討するうち，人の表象には意味的な表象と手続き的な表象の2種があることを考慮すべきだという見解に至る．その時に参照されたのが，例えばCrittenden[2]，[3]，KihlstromとCantor[11]，Clyman[12]などの論文である．既述のように，愛着行動は手続き記憶によると述べたのがCrittendenである．それよりも前の1984年に，KihlstromとCantorは認知心理学，認知社会心理学の分野から，人が自己という概念をいかにして持つのかという問題について論じたのだが，その中で，彼らは対人的なやり取りは手続き記憶のひとつであると述べている．彼らによれば，自己概念はそもそもエピソード記憶や意味記憶とのつながりは多いが，一方で，パーソナリティ特性の要素として社会的認知を人と関わる行動へと変換する手続き知識があることは無視できないという．続けて彼らは，社会的やりとりの中で人が使う交流スキルや，自己表現の仕方，社会的相互作用のスクリプト，社会的な情報資源に人が注目する際の好みの方略，印象形成や社会的判断の際のルール（アルゴリズム，ヒューリスティック）などが，手続き記憶に含まれ，これらは言語報告が困難であるという点で，人の気づきの枠外にあると論じた．

精神分析家であるClymanは，分析家たちに潜在記憶・手続き記憶の概念を紹介したとされる[13]が，1991年のその論文[12]で，認知や知覚，運動の手続き知識に関する研究成果をふまえるなら，感情emotional手続きという概念が導き出されるはずだと述べた．車の運転をしている時の手続き知識に言えるように，この感情手続きは，人の複雑な関わりの中や内的対象世界の中で我々の考えること，我々が行うことの組織化に関わっている．またこれは乳児が養育者との関わりの中で形成していくもので，自己の感情状態にどのように反応するか，感情がその後の思考や行動をどう方向づけるのかなどの，特定の方法が手続き的に記憶されるのだという．そしてこの知識は一生を通じて人の感情機能のもとになる．精神分析治療とは不適応的な感情手続きを修正することである．というのが彼の主張である．さらに，記憶理論の宣言的記憶／手続き記憶の二分類は，転移や防衛など精神分析の概念についての新しい見方について示唆に富むものであると評価している．ボストングループは，特に人と人との関わりのあり方の理解において，この手続き記憶という概念に注目したのである．次に彼らの主張をみていこう．

既に述べたようにLyons-Ruthら[7]は，精神分析理論の再考において，手続き的知識を考慮する必要性を強調した．彼らによれば，人が誰かと共に何かをするときには，いかにそれを行うかについてのルールに関する，しかし言語などの象徴としては符号化されない暗黙のimplicit知識，手続き知識に基づいているという．例えば，どうやって人と冗談を

言い合うか，人との関係の中でどのように感情を表すか，などもこの手続き知識による．ちょうど自転車の乗り方に関する知識のようなものであるが，特に人との関わり方に関する知識ということで，彼らはこれを“関わり方について暗黙に知ること implicit relational knowing”と呼んだ．“関わり方について暗黙に知ること”は，言語獲得以前から始まって生涯続くものであり，それによって得られた知識は基本的には言語には変換されない．これは，精神分析理論でこれまで内的対象関係とよばれてきたものも含むが，病理的な知識もノーマルな知識も両方がありうる，もっと一般的で現実の関係をもたらすものである．そしてこの知識は，乳児の発達過程において赤ん坊と養育者との間で何度も繰り返されるパターンから形成される．一方，適切な発達環境の下ではこの知識は，日々の相互交流でアクセスされる際に常に更新され，より複雑に，より明瞭に，新しい交流が出来るよう両者によって新しいパターンが創造されていくものでもあるという．この新しいパターンが創造される，変化が起こる，ことが治療過程の解明に関して彼らが重視するところである．つまり，治療者と患者の間においても関わり方の暗黙の知識が作用しており，これが間主観的な治療の場を作るが，そこで予想外のことが起こるなどして，情緒が高まる瞬間がくることがある．ただしその瞬間は言語化が出来ず，解釈の対象にはなりえず，両者の間での何か関係が変わる瞬間なのだという．これに似たことは，ストレンジ・シチュエーション法による愛着研究においても観察されるという．つまりその瞬間は，関わり方の暗黙の知識からすると両者の期待から外れることが起こって，双方が新しい関わりのパターンを考え出して良いという瞬間である．そのことが双方にとらえられた時に，従来の暗黙の知識の再編成が起こる．彼らはこれを“出会いの瞬間 moment of meeting”と呼び，これが治療上の重要な変化が起こる瞬間，洞察以上の何かである，と考える．*

Sternら[14]は，治療過程における重要な変化について，乳児–養育者関係，間主観性，非線形性などの側面に注目して考察したが，やはりその際の重要なポイントとしてまず挙げているのが，人と人とのやりとりの多くは手続き知識だということである．人が特定の関係性の文脈で，どのようにふるまうかは潜在的 implicit 知識となるが，これはもちろん力動的な無意識や抑圧ということではない．治療関係においても同様で，治療の進行はいつも明確化されるとは限らず，気づきの枠外で進行することが少なくない．乳児と養育者のやりとりもこれに似ているという．そしてSternらは精神分析の治療過程が，“moving along（進行過程）”，“now moment（この瞬間）”，“moment of meeting（出会いの瞬間）”，“open space（開放空間）”の4つのステップを経て進行するという．精神分析過程についての議論は本論の主題ではないが，後の議論と関係するところもあるのでこれについても少し述べておきたい．最初の“moving along”段階は，通常のやりとりの段階であり，このやりとりは暗黙の手続き知識に基づくものである．即興的にやりとりの微調整，修復は起こるが，ここで繰り返されるやりとりはスキーマとして一層定着することになる．次の“now moment”は，先の通常のやりとりの中で予想外の出来事が起こったことによる情緒変化（主に驚き）を伴う瞬間である．この瞬間は通常モードがあってこそ，それとは異なる瞬間として間主観的な場に出現するものであるという．さらにその瞬間を，治療者と患者の双方がつかんだときが“moment of meeting”の段階で，これについては先

* 筆者の見るところ彼らは直接言及していないが，Piagetの同化と調節，均衡化の概念と重なるものである．

にも述べたとおりである．“open space”は，出会いの瞬間ののち双方がどのような関わりのあり方を取るかが定まっていない，双方にとって自由な瞬間である．ここで新しい均衡が得られると，再び最初の“moving along”段階に入り，このプロセスが繰り返される，というのが，彼らの治療過程論である．

Sternらの見解と先のLyons-Ruthらの見解を比較すると，通常の交流における暗黙の知識の意味合いに幾らか違いもみられる．Sternらによれば，通常のやりとりの段階では即興的に微調整，修復は起こるが，基本的には過去に獲得した手続き知識にもとづいて交流が行われる．何か予想外のことが生じた出会いの瞬間があったときに，大きな変化，手続き知識の再構築が起こるという経過をたどるという．一方，Lyons-Ruthらは，出会いの瞬間に手続き知識の再編成が起こる一方，日々の相互交流でも新しいパターンが創造されていくものであるという．ただし，Lyons-Ruthらのいう“適切な発達環境の下では”という条件に重きをおいてみるなら，Sternらとの違いは，臨床的な関係とそうでない関係に見られる相違を述べたものととらえて良いのかもしれない．この点は次節で触れるつもりである．

このようなボストングループの議論に対して，Beebe [15] もグループ内で用語法やいくつか見解に不統一なところ，臨床例がまだ十分ではない面はあると述べているが，同時にこれまで精神療法の中でほとんど考えられることのなかった手続き知識の概念を，治療過程の理解に取り入れたことを評価している．さらにこうした見方は病理だけでなく発達の理解にとっても意義があるという．Fonagy [13] もまた，臨床実践上の課題等はあるが，そもそも宣言的記憶を探索することにもっぱらであった精神分析に，手続き知識的視点を取り入れたことを評価している．一方，Modell [16] は，治療過程を間主観的に理解することには賛同するが，乳児–養育者関係と，成人患者における治療関係を同様に考えることには慎重であり，さらに手続き記憶概念の援用については否定的意見を述べている．これに関しては次節で述べたい．

4. 人とは手続き記憶によって他者と関わるのか

さて，個人が他者とどのようにして関わるか，そのやり方，一連のプロセスは手続き記憶としての知識なのだろうか．乳児–養育者間，精神分析における成人患者–治療者間のやり取りが手続き知識に基づくものだとするなら，それは発達の初期や病理であることを超えて人の相互交流に一般化されるのだろうか．ボストングループの研究は成人の精神分析治療過程を理解することが目的であり，対人交流一般が手続き記憶によることを直接議論しているわけではないが，彼らは確かにそれを想定している．また，Kihlstrom，Clymanにおいても同様である．人はいかにして人と関わるのか，感情の交流とは，コミュニケーションとはという，我々にとって大いに関心のあるこの問題に，“手続き記憶”という認知科学の概念が，もし一つの答えあるいは解決の糸口を与えてくれるのならば，それはとても魅力的である．しかし実際は，本論で紹介した諸文献を見ても，人と人の関わり方と手続き記憶を結びつけること自体について，さほどの議論がなされているわけではないようである．つまり，アナロジーにすぎないようにも思われる．

たとえば，Kihlstromは [11]，記憶システムの視点からパーソナリティの構成要素を考察する際に，記憶理論を解説するかたちで，手続き記憶に対人の交流スキルが含まれると

述べているにすぎない．Clylam [12] は，手続き記憶の概念が精神分析の治療過程の新しい理解をもたらすものであるとして，これに注目したのだが，彼自身も述べるように，手続き概念，特に感情の手続きに関する議論は推測レベルである．当時は，記憶研究，特に潜在記憶や手続き記憶の研究が始まって間もない頃であることを考えれば，むしろこれは将来への課題提示ととらえるべきであって，定義の曖昧さや推論的であることはやむを得ないかもしれない．が，その後の展開も含めて些か安易に手続き概念が取り入れられてしまっているようである．例えば，Clymanの記述に既に見られるのだが，彼が感情手続き，また認知手続きと述べながら，その喩えにあげているのは車の運転スキルである．実はこの喩えは結構多く，丸田 [6] の間主観性の解説にも，ボストングループの議論 [7] にも見られ，手続き記憶の好例はもっぱら運動スキルとなっている．記憶理論において，手続き記憶は運動スキルだけを言うわけではもちろんないし，対人交流の手続き知識があるとするなら，車や自転車の運転の仕方やテニスの球の打ち方の喩えは分かりやすいかもしれないが，これだけで説明するのは適切ではないだろう．

また，手続き記憶概念が有用とされた大きな要因は，それが意識的な気づきの外（implicitな領域）のものだからというところにある．つまり，過去の体験によって獲得され，その人の他者との後のやりとりのあり方に知らず知らずのうちに影響を及ぼす，暗黙の知識としての手続き記憶である．この“implicit”であるという特性は，言語獲得以前の幼児や，言語化が困難な患者との関係に関して，Freudの抑圧による無意識概念によるものとは違う新しい理解をもたらすものとして，Clymanやボストングループのメンバーたちの注目を集めた．しかし，既に述べたように，記憶理論においては“潜在記憶＝手続き記憶”なのではない．Modell [16] がボストングループの特集論文に対してコメントしたように，“関わり方について暗黙に知ること（implicit relational knowing）”と手続き知識であるということとの間には乖離がある．すなわちimplicitであっても手続き的であるとは限らない．後に愛着理論に関してFonagyが述べていることであるが [4]，発達初期の愛着型が将来に渡って継続したり，将来のその人の愛着型を予測するようなデータは得られていないという．手続き記憶は一般に頑健な記憶であり，一旦獲得されるとブランクがあっても正しく想起されると言われる．そうだとすると，乳児の愛着関係が手続き記憶であるとみなすことについても再考が必要になるかもしれない．

さらに，Modell [16] によれば，乳児–養育者関係と成人患者–治療関係との間もアナロジーであるという．発達初期の乳児の二者関係と，過去の様々な体験や記憶を持っている成人患者の二者関係は本質的に異なるところがあるはずだ，というのである．もしそうならば，やはり対人交流は手続き記憶であると一般化することには，我々は慎重であらねばならない．

本来，人と人とのやりとりは一回性のものであって，それは自転車のモデルの違いに対応して運転できるようになることと同じではないはずだ．運動スキルだけでなく，算数や作文，ハノイの塔課題など認知レベルのスキルにしても，一旦スキルが獲得されれば新しい問題，応用的な問題，初めてのテーマなど，課題状況に応じて柔軟に対応できるようになるが，これらは基本的には，遂行者からのはたらきかけと環境からのフィードバックの関係である．２つの主観と主観との関係で経験されることは，これらとは別の次元のように思われる．また，いわゆる手続き記憶課題ならばあるような，解決の目標値や正解（例

えば，自転車に乗って倒れずに前に進むこと，算数の問題が解けること，等々）は，対人交流にはおそらくない．間主観性ということを言うのであれば，運動スキルはもちろん，いわゆる手続き記憶課題におけるスキルの喩えだけではやはり不適切であろう．そのようにみてくると，人と関わる場面で我々がいかにふるまうかを，記憶システム論の問題として語って良いのか，過去の体験に基づく知識の想起によるものと語って良いのか，そのこと自体も問われるべきかもしれない．

そこで一般化ではなく，それとは逆に，対人交流において手続き記憶としての機能が表れるのは，特別な状況だと考えてみてはどうだろう．発達早期の愛着関係にみられるやりとりや，対人関係の適応的問題を抱えている患者の場合は，特定のパターンが繰り返されるという意味で，その交流は手続き記憶的であるという見方（これもアナロジーかもしれないが）ができるのではないだろうか．乳児と養育者との間のお決まりのやりとり，患者の膠着した対人関係の取り方は，手続き知識のように想起されているものかもしれない．乳児との関係においては，母は乳児に分かりやすいように応答の変数を減らし，乳児が“手続き的”に対処できるようにしている可能性もある．また，人によって，或いは場面によって，相手との関わり方が過去に身につけた“手続き記憶的”パターンに偏るケースはあるかもしれない．その点では，愛着関係は手続き記憶的に形成される，患者−治療者のやりとりにおいて手続き記憶的要素があると言うのは正しいかもしれないが，それは対人交流一般が手続き記憶だというのとは違う．

対人的なやりとりについて言えば，筆者には，むしろ注目すべきはSternらが述べている“open space”[14]という概念の方にあるのではないかと思われる．その空間においては，やりとりをしている双方は既に持つ知識，過去の記憶に規定されてふるまうのではなく，両者共に基本的に自由である．Sternによれば，このオープンな空間は，通常からの逸脱に対する驚きの後に広がるものとされるが，人とのやりとりにおいて本来人はこのオープンな空間にいることができるのであり，手続き記憶を超えたところでやりとりが行われているのではないだろうか．前節で筆者はSternらの見解とLyons-Ruthらの見解に幾らか食い違いがあることについて述べたが，その食い違いは手続き記憶概念を対人的関わりの中心に据えてしまうとことによるものではないかと思う．適切な発達環境では，本来新しい，オープンな交流ができるのであって，その都度過去の手続き記憶が構築し直される過程を考えるのは無理があるように思う．これに関連することとして，筆者はReddy[17]の主張に注目したい．彼女は二人称アプローチという視点で，乳児が早期から積極的に人とやりとりしていることを，模倣や対話，注目を経験すること，相手をもてあそぶ・だますこと等，乳児の活動の様々な側面から論じている．その著書の中で彼女は，SternやTronicの研究をしばしば参考にしているが，乳児と大人の関わりが上記のオープンシステムである点を強調する．彼女の観察によれば，二ヶ月児は通常の大人との関わりの中で予想外のこと，驚くことを求めているようだという．人と人の関わりについて理解するには，このオープン性が考慮されるべきだ，ということになろう．

5. おわりに

このように考えてくると，対人的な関わりが手続き記憶による，と一般化して言うことはできない．言えるとすればそれは，発達早期の子どもの養育者との特別な関係や，臨床的問題が関わる特別な人間関係において，となるかもしれない．本論で紹介した研究者たちも述べるように，人が人とやりとりをすることに関しては，言語化が困難で意識的に気づきにくい"implicit"過程が関わっていることに光を当てた点では，手続き記憶概念の導入は意義があるかもしれないが，またこれも研究者たちが認めていることでもあるが，対人的やりとりの重要な要素であるはずの感情の問題がほとんど考慮されていない．感情もまた言語化が困難であることに加え，強い感情を伴う体験は繰り返しが無くとも潜在記憶となることもあるなど，手続き記憶とも異なる面がある．さらに，ボストングループに手続き記憶概念を紹介する役割を果たすことになった一人であるKihlstromのその後の研究について最後に触れておきたい．彼は2008年の無意識についての考察で，無意識に関わる諸現象はFreud理論ではなく認知科学のimplicit概念で説明が可能であること，思考や活動が意識化されることの鍵は自己に関する表象との関わりの有無にあるだろうと論じた[18]．あわせて，認知科学においてこれまでに研究されてきた無意識は主に潜在記憶に関するものであり，動機や感情過程に関しては研究途上の部分が大きいとも述べている．彼は，意識的気づきの鍵であるとしたその自己表象について，2012年には脳科学の知見も参照して論じている[19]．それによれば，自己概念は単一でなく文脈に依存して多様にあると考えるべきであるという．そして，最大の問題は自己表象が何かという本質的なことがいまだ明確になっていないことであるという．脳科学が発展してもこの問題を解決してくれるわけでは決してないのである．私たちは人といかにして関わるのか，感情とはどのように関わるのか，意識による気づきとは，私とは何か・・・難問が残されている．

文献

[1] 橋本圭子：発達早期の記憶に関する研究—手続き記憶と愛着—；新潟工科大学研究紀要，**19**，107–120, 2014.

[2] P.M.Crittenden：Internal Representational Models of Attachment Relationships；*Infant Mental Health Journal*, **11**, 1990.

[3] P.M.Crittenden："Peering into the Blackbox —An Exploratory Treatise on the Development of Self in Young Children"；In D.Cicchetti & S.L.Toth (Eds.), *Disorders and Dysfunctions of the Self. Rochester Symposium on Developmental Psychopathology, vol.5*, University of Rochester Press, Chap.4, pp.79-148, 1994.

[4] P.フォナギー（著），遠藤俊彦，北山修（監訳）：愛着理論と精神分析；誠心書房，2008.（原著 P.Fonagy：*Attachment Theory and Psychoanalysis*；Other Press, 2001.）

[5] D.M.オレンジ，G.E.アトウッド，R.D.ストロロウ（著），丸田俊彦，丸田郁子（訳）：間主観的な治療の進め方—サイコセラピーとコンテクスト理論—；岩崎学術出版社，1999.（原著 D.M.Orange, G.E.Atwood, R.D.Stolorow：*Working Intersubjectively —Contextualism in Psychoanalytic Practice—*；The Analytic Press, 1997.）

[6] 丸田俊彦：間主観的感性—現代精神分析の最先端—；岩崎学術出版社，2002.

[7] K.Lyons-Ruth, N.Bruschweiler-Stern, A.M.Harrison, A.C.Morgan, J.P.Nahum, L.Sander, D.N.Stern,D.N., & E.Z.Tronick,： Implicit Relational Knowing: Its Role in Development and Psychoanalytic Treatment； *Infant Mental Health Journal*, **19**, 282-289, 1998.

[8] E.Z.Tronick：Intervention That Effect Change in Psychotherapy—A Model Based on Infant Research.—；*Infant Mental Health Journal*, **19**, 227-229, 1998.

[9] D.L.Schacter：Understanding Implicit Memory: A Cognitive Neuroscience Approach； *American Psychologist*, 47, 559-569, 1992.

[10] A.Baddeley, M.W.Eysenck, & M.C.Anderson：*Memory*；Psychology Press, 2009.

[11] J.F.Kihlstrom, & N.Cantor：Mental Representations of the Self；In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 17, Academic Press, pp.1-47, 1984.

[12] R.B.Clyman：The Procedural Organization of Emotions:—A Contribution from Cognitive Science to the Psychoanalytic Theory of Therapeutic Action—； *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **39** (S), 349-382, 1991.

[13] P.Fonagy,：Moments of Change in Psychoanalytic Theory—Discussion of a New Theory of Psychic Change—；*Infant Mental Health Journal*, **19**, 346-353, 1998.

[14] D.N.Stern, N.Bruschweiler-Stern, A.M.Harrison, K.Lyons-Ruth A.C.Morgan, J.P.Nahum, L.Sander, & E.Z.Tronick：The Process of Therapeutic Change Involving Implicit Knowledge—Some Implications of Developmental Observations for Adult Psychotherapy— *Infant Mental Health Journal*, **19**, 300-308, 1998.

[15] B.Beebe：A Procedural Theory of Therapeutic Action—Commentary on the Symposium, "Interventions That Effect Change in Psychotherapy"—；*Infant Mental Health Journal*, **19**, 333-340, 1998.

[16] A.H.Modell：Review of Infant Mental Health Papers；*Infant Mental Health Journal*, **19**, 341-345, 1998.

[17] V.レディ（著），佐伯胖（訳）：驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称アプローチ」から見えてくること—；ミネルヴァ書房，2015.（原著 V.Reddy：*How Infants Know Minds*；Harvard University Press, 2008.）

[18] J.F.Kihlstrom：The Psychological Unconscious；In O. John, R. Robins, & L. Pervin (Eds.), *Handbook of Personality—Theory and Research*, 3rd.ed., Guilford, Chap.23, pp.583-602, 2008.

[19] J.F.Kihlstrom：Searching for Self in Mind and Brain；*Social Cognition*, **30**, 367-379, 2012.